様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １０ 日現在

機関番号：２５２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２８５８

研究課題名（和文）問題発見解決型学習における日本語学習動機の発達プロセス

研究課題名（英文）Developmental process of motivation for learning Japanese in Problem-based Learning

研究代表者
小林　明子（Kobayashi, Akiko）

島根県立大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：４０５４８１９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では留学生と日本人学生との協働によるPBL（Problem-based Learning, Project-based Learning）の授業実践を実施し、留学生の動機づけの変化と影響要因を分析した。動機づけの観点からPBLにおいて必要な教育的支援を考察し、異文化間協働学習を実施する上での課題と改善案を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年、国際的な人材育成の観点から留学生と日本人の共修授業が増加している。しかし、そのような異文化間協働学習において、留学生が文化摩擦をどう解釈し、学習に取り組んでいるのかという、動機づけの発達プロセスと影響要因は十分に解明されていない。本研究では留学生と日本人学生によるPBL授業の実践を通して、異文化間協働学習を実施するうえでの留意点や教師役割に関する情報を提供した。

研究成果の概要（英文）：In this study, several PBL (Problem-based Learning, Project-based Learning) classes were conducted in collaboration with international and Japanese students. In addition, we analyzed changes in international students' motivation for learning Japanese, and considered factors that influence motivation. We discussed the educational support necessary for PBL from the viewpoint of motivation, and proposed issues and improvement plans for intercultural cooperative learning.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語学習動機　留学生　国際共修授業　PBL　Problem-based LearninL　Project-based Learning

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）　第二言語教育における動機づけ研究は、動機づけの特徴を明らかにする記述的研究を経て学習者をどう動機づけるかという教育的課題へと関心を移している。日本語教育における研究では、留学生を対象とした調査から、留学中の日本人や社会との接触が国際的なキャリア形成に関する意識や日本語学習に対する動機づけに肯定的影響を与えることが分かっている。その一方で、学習者が異文化摩擦や葛藤を乗り越えて主体的に学習に取り組むためには、その体験を意味づけし、再解釈する場や支援が必要であることも示唆されている（小林, 2014)。そのため、異文化接触を伴う学習の場を意図的に創りだしたうえで、文化摩擦や葛藤を乗り越えるための教育的支援の在り方を探る必要がある。

（２）　近年、上記のような課題に関連して、異なる文化背景を持つ学習者による PBL（Problem-based Learning, Project-based Learning）が注目されている。PBL では身近な問題を課題とし、解決に向けてグループで調査、分析、討論等を行う。そのため課題遂行の過程において文化摩擦も生じるが、その体験自体も課題のひとつとして話し合われ、解決方法が探られる。先行研究では PBL により、授業後に動機づけや異文化理解の意識が高まることが示されている（島崎, 2017；Park &Hiver, 2017)。しかし、教室内に出現する異文化コミュニティに対し、学習者がどのような参加過程をたどり、文化摩擦や対立をどのように解釈してその後の学習に動機づけられていくのか、学習・教育環境の影響を包括的に検討した調査は十分とはいえず、さらなる実証的研究が必要とされる。

２．研究の目的

本研究の目的は、留学生と日本人学生との協働により実施する PBL において、日本語学習に対する動機づけがどのように向上 （低下）するのか、その変動プロセスと影響要因を分析し、異文化間の協働学習において必要となる教育的介入を動機づけの観点から考察することである。

３．研究の方法

（１）　文献レビューにより、第二言語教育及び日本語教育の分野における動機づけに関する研究成果と課題を整理した。

（２）　留学生と日本人学生との協働による PBL を実施し、動機づけの変化と影響要因について、量的調査（質問紙)、質的調査（半構造化インタビュー、授業内の発話の分析等）を通して縦断的に分析した。留学生と日本人学生による共修授業に加えて、日本語授業における PBL も調査対象とした。2020 年度以降はコロナウイルスの影響により、授業方法がオンラインに変更となったため、オンライン環境下における授業も調査対象に加え、探索的実践と調査分析を行った。

４．研究成果

（１）　文献レビューにより、第二言語教育分野における動機づけに関する最新の研究動向を整理し、日本語教育における今後の研究課題をまとめた。特に教室における動機づけに関わるものとしては、タスクの動機づけ（task motivation）やエンゲージメント（engagement）の概念を中心に概観し、これらが教育システムや集団との相互作用を通して、協働的に構築される動機づけであることを確認した。実施した文献レビューの成果については書籍の一部として刊行した。また一部は市民・学生向け講座でも解説した。

（２）　留学生と日本人学生による共修授業として実施する PBL（2019、2021、2022 年度実施)、日本語授業における PBL（2018、2019、2020 年度実施）を調査対象とし、動機づけの変

化から PBL 実施上の留意点や教師の役割を考察した。このうちコロナ禍以降の一部の授業実践はオンラインにより行った。実践と分析結果については学会発表・論文投稿により公開した。実践から得られた主な示唆は以下の通りである。

① 対面およびオンラインのいずれの形態の PBL でも、日本語学習に対する動機づけの変化には個人差が見られ、動機づけが向上する学習者、ほぼ変化がない学習者、下降する学習者が見られた。

② ①のような多様な動機づけの変化には、PBL における協働的な学習（グループ調査、分担読解、討論等）の意義をどのように捉えるかという点が関わっていた。日本人学生とともに行った討論や分担読解を有意義だと認識した留学生については、日本語学習に対する動機づけが向上していたが、それらの活動において相手の発言意図が理解できない、話し合っても考えが深まらないと認識した留学生では動機づけが低下していた。このことから、動機づけを高めるためには PBL の中核的な活動である協働学習の利点を十分に享受するための教育的支援が必要であることが示された。

③ ②に関連して、グループ討論における発話を分析したところ、自発的に質疑応答して議論を発展させたグループと、結論を急ぐあまりに議論が十分でないグループが見られた。このことから PBL における話し合いが十分に機能するような準備が必要であることが示された。具体的には、(a)予めグループ内の役割分担を決め、話し合いの項目や到達点を確認しておくこと、(b)グループ討論の前の個人活動の段階で、より多くの時間を割いて議論のベースとなる知識を共有しておくことにより、その後の討論が活発になるようにすること等が挙げられる。

④ ①のような動機づけの変化には PBL 自体の活動特性も関わっていた。PBL では学習者自身がテーマを決めて学習を進めるため、特にアジア出身者の留学生のなかには、このような自己決定を求められる活動に不安を覚える者も存在した。動機づけの向上が見られた留学生では、PBL が内容重視型の授業であることにより、正確な日本語で話さなければならないという不安が軽減され、自身の関心に応じて自律的に参加できていた。一方、PBL のような授業形態に馴染みがない留学生では、学習の進め方のイメージが掴めず、不安を感じて動機づけが低下していた。このような傾向は特にオンラインの授業で顕著であった。これは対面授業と比較してグループ内のコミュニケーションが取りづらかったことや授業外での教師への相談がしにくかったことに起因すると考えられる。教師は、PBL に馴染みがない留学生の存在を認識したうえで、このような学習者に対しては個別に声掛けをし、学習の進め方を助言する機会を設ける必要がある。

⑤ 留学生と日本人学生の協働による PBL に関して双方の意識の変化を分析した。その結果、日本人学生に関しては異文化理解や協働的な学習への取り組みについて授業後に自己評価が高くなっていた。一方、留学生では自己評価の変化が見られなかった。コロナ禍のため、一部の授業において留学生は海外からオンラインで参加しており、十分に日本人学生とコミュニケーションが取れなかった可能性もある。留学生の参加人数が少なく、日本人学生と留学生の人数バランスが取れていなかったため調査データとして十分とはいえないが、今後は、提出課題や教師の授業記録等を詳細に分析することにより、このような意識の相違が生まれた背景を詳細に探り、実践の改善を続けたい。

〈引用文献〉

小林明子（2014）「中国人留学生の日本語学習に対する動機づけの形成過程　日本における将来

像との関連から」『異文化間教育学会』40，1-15.
島崎薫(2017)「地域住民との国際共修　留学生のアイデンティティの変化に着目して」『東北大学 高度教養教育・学生支援機構紀要』3，228-237.
Park, H., & Hiver, P. (2017). Profiling and tracing motivational change in project-based L2 learning. *System*, *67*, 50-64.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 福田倫子・小林明子	４．巻 37（1）
２．論文標題 オンライン日本語授業におけるPBLの実践 －動機づけの変化に関する探索的調査－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 文教大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小林明子・福田倫子	４．巻 51
２．論文標題 中上級日本語クラスにおける Problem-based Learningの試み －学習者の動機づけに着目して－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本語教育研究	６．最初と最後の頁 41-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21808/KJJE.51.03	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 福田倫子・小林明子	４．巻 34(1)
２．論文標題 日本語学習者同士の対話における内容の変化 －PBL授業における問題解決に向けて－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 文教大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 107-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15034/00007632	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小林明子・福田倫子	４．巻 33
２．論文標題 Project-based Learningを通した動機づけ変化の質的検討ー中上級日本語学習者の地域における実践からー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 言語と文化	６．最初と最後の頁 23-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小林明子・奥野由紀子	４．巻 22
２．論文標題 内容言語統合型学習（CLIL）の実践と効果 ―日本語教育への導入と課題―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 第二言語としての日本語の習得研究	６．最初と最後の頁 29-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 福田倫子
２．発表標題 文化的言語的に多様な子どもたちに関わるときに知っておいてほしいこと－彼らを取り巻く環境とことばについて－
３．学会等名 学習支援教室たけのこスタッフ講座
４．発表年 2022年

１．発表者名 福田倫子
２．発表標題 日本語教室ボランティアスタッフ養成講座（中上級）－初級・中級との教え方の違いは何か－
３．学会等名 春日部市国際交流協会・春日部市共催　日本語教室ボランティアスタッフ養成講座
４．発表年 2022年

１．発表者名 小林明子
２．発表標題 どうすれば、やる気を持ち続けられるのか ―第二言語（外国語）としての日本語学習における動機づけ―
３．学会等名 県立広島大学　ことばとことばの教育セミナー（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 福田倫子
２．発表標題 はじめて教える・はじめて学ぶ―言語習得の考え方を取り入れて教えてみよう―
３．学会等名 埼玉県春日部市国際交流協会・春日部市共催　日本語ボランティアスタッフ養成講座
４．発表年 2021年

１．発表者名 福田倫子・小林明子
２．発表標題 問題発見解決型学習（Problem-based Learning）が日本語学習者の動機づけに与える影響－中上級学習者を対象に―
３．学会等名 韓国日語教育学会第36回冬季学術大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小林明子
２．発表標題 異文化理解の心理学
３．学会等名 島根県立大学公開講座
４．発表年 2019年

〔図書〕　計4件

１．著者名 福田倫子	４．発行年 2022年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 14
３．書名 「第1章　第二言語習得における個人差」福田倫子・小林明子・奥野由紀子編著『第二言語学習の心理　個人差研究からのアプローチ』	

１．著者名 小林 明子	４．発行年 2022年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 22
３．書名 「第５章　第二言語不安」福田倫子・小林明子・奥野由紀子編著『第二言語学習の心理　個人差研究からのアプローチ』	

１．著者名 小林 明子	４．発行年 2022年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 25
３．書名 「第６章　動機づけ」福田倫子・小林明子・奥野由紀子編著『第二言語学習の心理　個人差研究からのアプローチ』	

１．著者名 小林 明子	４．発行年 2021年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 11
３．書名 「第５章　個人差がSLAに与える影響」奥野由紀子編著『超基礎・第二言語習得研究』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	福田　倫子 (Fukuda Michiko) (20403602)	文教大学・文学部・教授 (32408)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関